

夏の県大会を制し、夏10回目、春夏通算20回目となる「節目の甲子園」出場を決めた八学光星。春の苦杯をバネに成長を重ね、県代表の座をつかんだナインは、令和初の大会で悲願の

# 光星 節目の夏

10度目 甲子園

初優勝に挑む。今度こそ。(大久保拓地)  
県大会制覇の原動力となったのは、春の県大会で青森山田に受けた初戦敗退の屈辱だ。昨春、夏、秋と3季連続でライバル・青森山

## 春の苦杯バネに成長

田にコールド勝ちしていた光星だったが、今春の県大会では先発後藤が打ち込まれ、5-7で敗れた。全国常連の光星にとつて、初戦敗退の事実は簡単には受け入れられなかった。チームの士気は目に見えて落ち込み、「気持ちばらばらになりかけた」と主将・武岡は振り返る。一方で、ナインは野球で受けた屈辱は野球で返すしかないことを理解していた。総力を挙げた「対青森山田シフト」が動きだすのに時間はかからなかった。まず取り組んだのは練習量の増加。追加トレーニングの回数を大幅に増やし、野手は青森山田の投手陣が投げる145球前後の速球に対応できるよう毎回500回以上バットを振り込んだ。投手陣は、地道な下半身トレーニングやフォーム

## 悲願へ自信取り戻す

修正を行い、制球力や変化球のキレを向上させた。練習量は一日7時間近くに及んだ。これまでも厳しい練習に耐えてきた武岡や近藤ら主力選手たちが「ものすごくしんどかった」と口をそろえる過酷な練習を



夏の県大会決勝で聖愛を下し、喜びを爆発させる八学光星ナイン。7月23日、弘前市のはるか夢球場

いじめ抜いた。大会直前の7月からは、青森山田の試合映像を寮のホールで繰り返し流し、打者の苦手球種や戦術傾向などを分析。青森山田ナインを「丸裸」にすることで、勝つイメージを植え付けた。

万全の準備で迎えた県大会。優勝候補対決は早々と3回戦で訪れる。データから相手打線が左腕に弱いとふんだん監督は、先発に左の横山海を初起用した。これが的中し、横山海は9回1失点の好投。打線は先制された直後の初回にすぐ逆転し、その後も中押し、タメ押しで4得点。警戒していた小牟田、堀田の両投手をとりえ春の雪辱を果たした。過酷な練習と徹底した分析がもたらした勝利だった。「今振り返ると、春の敗戦は甲子園出場のため必要だった」と仲井監督。自信を取り戻した光星にかなう相手は、県内にいなかった。